

先日6月19日（土）、現在の所蔵作品展に展示されているアンリ・マティスの『ジャズ』について、コレクショントークしました。



↑コレクショントークの様子

マティスの制作において非常に重要とされるこの『ジャズ』は、主に晩年に制作するようになった切り紙絵の手法を用いたオリジナル作品を、1947年にステンシルで印刷して発行した挿絵本です。なかには20点の挿絵があります。

切り紙絵というのは、助手が色を塗った紙をマティスが切り抜き、それを紙の上で構成して貼り付ける手法です。この制作方法は、もともと1910年代のバレエの舞台装飾や、1930年代のバーンズの壁画など、大規模な作品を制作する際に用いられました。その後この『ジャズ』の制作を機に、切り紙絵はマティスの主な制作を担うようになりました。

作品のタイトルは『ジャズ』というタイトルがつけられていますが、もとは『サーカス』というタイトルが考えられており、20点の挿絵のうちの多くが、空中ブランコ、曲馬、綱渡りなど、サーカスを題材にしています。



↑ 《道化師》（右）、綱渡りをする人物を表現した作品（左）

トーク中、「数点の作品には白い空白がありますが、これは何ですか？」という質問がありました。



↑ 空白のある作品、右の挿絵は《イカロス》

この空白に、マティスは自分で書いた文章を入れました。展示しているのは挿絵だけがセットになった版ですが、画家の手書きの文章が全て入った版もあります。

マティスは切り紙絵の制作と平行して、1930年代からたくさんのデッサンや、デッサンによる挿絵を制作しました。それまで色彩表現を重視していたマティスですが、この時期のデッサンには豊かな表現力が花開いています。

切り紙絵は助手によって彩色され、それを画家が切り抜くという手法なので、マティエール感や、消したり書き足したりした制作の痕跡を残す油彩に比べると、どうしても画家のオリジナルの制作行為が見えにくいものです。『ジャズ』では、そうした切り紙絵の手法に、マティスのみずみずしい筆跡を加えることで、全体としてより豊かな表現を獲得しています。



↑個人的なお気に入り、マティスが手書きした図版一覧。個々の作品の図柄とタイトルが記されています。ゆるーいによろよろと書かれたような図柄は、なんともいえない味わいがあります。

さて、今回のコレクショントークでは、最後に展示室を移動し、アルプやミロのシュルレアリスムの作品が展示されている部屋にご案内しました。アルプやミロの生命体的なフォルムを示す作品と、当時アンドレ・マッソンなどのシュルレアリスムのアーティストとも交流を持っていたマティスの作品には共通性を感じることができます。



↑ミロとアルプの作品

マティスの『ジャズ』は個人的にとっても好きな作品です。華やかな色彩構成、有機的なフォルムの重なり、繰り返されるリズムカルな装飾モチーフなど、まさに音楽を聴くような心地で楽しく見ることができます。

マティスは『ジャズ』に添えた手書きの文章のなかで、次のように書いています。

喜びを空のなかに、木々のなかに、花々のなかに見出すこと。見ようとする気を起こしさえすれば花はいたるところにある。

マティスの『ジャズ』のなかに、皆様のちょっとした喜びが見つければうれしく思います。最後に、雨が降る悪天候にもかかわらず、このコレクショントークにお越しく下さいました皆様、ありがとうございました。まだご覧になられていない方もぜひ！美術館に足をお運びください。

(MRM)